

教会は、今日から新しい年になります。クリスマス前に降臨節の4回の主日があつて、日曜日ごとに一本ずつ蠟燭を増やして行って、四本揃ったらクリスマスになる、というふうに教会は教えてきました。今日、宮崎の週報の棚にはクリスマス行事の案内のプリントを入れてあります。そしてその裏に、4つの蠟燭の意味を書いています。

第1週は、「約束のキャンドル」。アブラハム、イサク、そして他のイスラエルの人々への神様の約束を表します。彼らの子孫を通して、すべての人々が祝福される、という約束です。第2週は、「預言者のキャンドル」。偉大なる大祭司であり、預言者であり、王であられる来たるべき救い主の誕生を預言した、イスラエルの預言者たちを表します。

第3週は、「バプテスマのヨハネのキャンドル」。イスラエルの民に救い主がじきに来られると告げた、バプテスマのヨハネを象徴します。第4週は、「マリヤのキャンドル」。「救い主が生まれる」と天の御使いが告げたよき知らせを、マリヤが信じて喜んだことを思い起こさせてくれます。そして、クリスマス当日は、5番目の蠟燭をつけることがあります。「キリストのキャンドル」。イエス・キリストが世の光であることを表します。私たちは、このような蠟燭を増やしてゆく習慣を通して、イエス様の誕生を準備します。今年は25日が日曜日なので、4番目の蠟燭をつけてからも1週間あります。

ところが、今日の聖書日課はどれも、救い主が誕生するのを待つような言葉は出てきませんでした。そうではなくて、救い主を意味する、「人の子」であるイエス様が、再び来られる時、つまり世の終わりのことについて、ノアの洪水のことなどを例に挙げながら、その時のために、心の備えをするように、というのが、福音書のテーマになっています。

福音書を読むと、世の終わりには「畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。」というので、何か、人が拉致されるような、恐ろしいことが起こることが、世の終わりであるかのように感じてしまいます。

マタイによる福音書のもう少し後には、マザーテレサが良く引用した、羊と山羊とを分けるたとえで、目覚めて用意している者と全く用意していない者が、完全に分けられるのだ、と私たちに告げています。

これらの警告の言葉は、わたしたちには、恐ろしい裁きのように思えるのですが、実は、イエス様は、この終わりの時こそが、私たちの救いの日になるんだから、その時を、眠って見逃すことがないように、時を正しく見定めなさい、と言っておられるのではないのでしょうか。

今日の旧約聖書は、イエス様より700年くらい前に生きていたイザヤという預言者が幻に見た終わりの日の状況が語られています。ここは「終末の平和」というタイトルがついているものです。

そこでは、エルサレムの神殿が光り輝いて、世界中の人が川の流れのようにこの神殿の建つ山に登ってきて、エルサレムの神殿から語られる言葉を聞いた人々が、平和を作り出す様子が語られています。

そして、イザヤ書2章4節目では、「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤（すき）とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」という、有名な言葉が出てきました。みなさんも、何度もこれを聞いたことがあるでしょう。

今世紀に入った2001年、アメリカで同時多発テロが発生し、ブッシュ大統領がアフガニスタンに攻撃をかけた時、当時のアメリカ聖公会の総裁主教が、声明を発表し、このツルギをスキにし、ヤリをカマに作り直すという、このイザヤの言葉を引用して、この大きな出来事をきっかけに、私たちは平和を作り出さなければならない、と述べたのです。

しかし、残念ながら、それから21年過ぎた現在まで、世界情勢は、全く平和の方向には行っていません。特に今年の2月24日、ロシアが隣国ウクライナに侵攻して戦いが始まりました。あれから9カ月過ぎましたが、戦争が終結する見通しは立たず、2年間続いた新型コロナウイルスが終わらないところへ追い打ちをかけるように戦争、そしてそれに伴う食糧危機や物価の高騰。特に経済成長から取り残された私たちの国は、どこへ向かうのでしょうか？

昨年1月、ジャーナリスト半藤一利さんが亡くなりました。冷静に戦後の社会を見ていた人ですが、この人が池上彰さんと、3年前に、「令和を生きる 平成の失敗を越えて」という対談本を幻冬舎新書として出しています。そしてその対談本の表紙には「政治の劣化、経済大国からの転落、溢れかえるヘイトとデマ。この過ちを繰り返してはならない」と書かれています。

裏表紙には、この本のまとめのような文章が引用されています。

「平成元年、ベルリンの壁と共に世界秩序も崩壊したことに気づかず、バブルに浮かれていた日本人。バブル崩壊後も、相次ぐ大災害と長きデフレにより、目先の生活を守ることに追われて、志向はさらに内向きに。そして日本は、「経済二流、官僚三流の国」となり、「デマと差別が溢れる国」となった。その姿は、国際社会から取り残され、無謀な戦争に突き進んだ戦前の日本にそのまま重なる。私たちはどこで道を誤ったのか？ どうしたらこの国を立て直せるのか？」

そして、「平成の失敗を徹底的に検証する白熱対談。」と紹介して、具体的な本の内容について箇条書きで書いています。

- 小選挙区制の導入で、政治家が政党のロボットになり下がった。
- 福島原発事故から統計不正まで、政府による情報隠蔽は戦時中と同じ
- オウム事件は過去の遺物ではない。ウソにまみれた陰謀論は今もはびこる
- ライブドアへの国策捜査が日本のIT産業の成長をつぶした
- 悠仁（ひさひと）親王に講義した日本の国防の話
- 分断の時代における国民統合の象徴という、天皇の新たな存在意義

これらの問題は、それぞれこの人たちの対談を読みながら、私たち自身でも検証してゆく必要があると思います。しかし、それはさておき、これらの多くの問題を提示した最後に、話の中心である半藤一利さんは、次のような言葉で締めくくっています。

『昭和の戦争の反省を礎とする平成の不戦の思想だけは、昭和がますます遠い過去になろうとも、ずっと令和の時代にもちつづけていって欲しいもの。そのためにも、冷静に、理性的に国際社会の現実を見る目と、不戦をしっかりと保持する意思を持つことが大事です。その如何によって地獄にもなれば世界の立派な平和国家にもなり得る、それが令和という時代なのです。それだけはたしかです。』

さて、本の紹介はそれぐらいにしますが、

今日の使徒書や福音書は、私たちに対して、神様が世の終わりに最後の審判をするために来られる、ということ告げて、そしてそのための用意をするように命じられています。世の中に次々嫌なことがあっても、神様からの強い働きかけ、恵みに目覚めて行動するべき時なのです。

私たちの心が、かきむしられるような出来事。恐ろしい戦争などが目の前に示された時、怒って、復讐を考えるのではなく、「今こそ、平和を作り出すことを神様が私たちに求めておられるのだ。」と、冷静に考える必要があるでしょう。勿論人間の力で平和など作り出せない、大変大きな力が世界には働いていますが、神様は、もう一度救い主を送って、平和を実現してくださるんだ、という希望を持って、自分のできることを果たしたいのです。

今年一年をふり返る時となりました。今年は半藤さんが亡くなったあと、ますます危機が迫っているように思います。

降臨節を迎えて、私たちは、イエス様の誕生を祝うクリスマスの準備のことばかり考えますが、イエス様が再び来られる、世の終わりこそが救いの日となることを覚えて、それに備える者でありたいと思います。